

# 教育相談課の分科会発表資料

## 〔 研 究 主 題 〕

不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究  
～「学校楽しいーと」等を活用した児童生徒への対応～

### 1 研究のねらい

不登校の長期化は、児童生徒の在り方や進路に影響し、その社会的自立に関わることから、長期化している不登校児童生徒を支援するための適切な対応や児童生徒を支える学校の支援体制の在り方が重要視されている。本県の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果によると、30日以上欠席した児童生徒数は、平成24年度が2,268人、平成25年度2,265人であった。このことから、学校組織として不登校解決のための具体策が十分に検討されているか、また担任や教育相談を担当する教員などの一部による情報交換と対応の在り方そのものに課題があるのではないかと考えられる。さらに、不登校の状態によっては、外部の関係機関や専門家と協力して対応に当たらなければならない場合、学校組織として関係機関との具体的な連携が不十分なため機能せず、適切な支援が遅滞し、不登校の長期化につながってしまうことも少なからずあるのではないかと考えられる。

そこで、これらを踏まえ、長期化している不登校児童生徒への対応を目的とするチームの支援者が保護者、関係機関の専門家と協働して、効果的に機能できる校内支援体制モデルを作成することをねらいとした。

### 2 研究の内容

- (1) 教員を対象とした実態調査から、長期化している不登校児童生徒への指導・援助の在り方を分析し、校内支援体制の課題を考察する。
- (2) 本課における相談事例を通して、長期化している不登校児童生徒を学校内・家庭・関係機関が機能的に連携して対応する校内支援体制モデルを検討する。

### 3 実態調査と分析

- (1) 「教員の不登校対応」に関する実態調査（平成25年8月～10月実施）の結果及び分析

実態調査は、県下公立小・中学校、高等学校の教員を対象に実施し、1,309人から回答が得られ、そのうち、60日以上欠席した児童生徒と関わった経験のある教員は784人であった。

図1は、60日以上欠席している児童生徒の対応についての結果である。このグラフから、多くの教員が「電話」や「家庭訪問」、「配布物」を「1週間に数回行う」対応をしていることが分かる。「毎日行う」と回答した教員数は、初期対応の質問項目の結果と比べると、いずれにおいても低い割合となっており、対応の差がはっきりと見られる調査結果となった。

図2は、60日以上欠席している不登校児童生徒について「生徒指導部会で指導・援助の方針等を話し合う」、「外部関係機関と連携をとる」について回答した結果である。生徒指導部会の話し合いについては、約48%が「定期的実施して

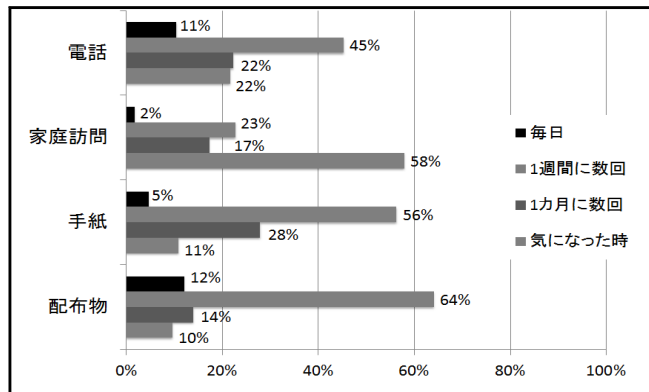


図1 長期化している児童生徒への対応

いない」と回答しており、約2人に1人の教員が情報を共有して対応をしていないことが明らかとなった。一方、外部関係機関については約77%が「定期的な対応を実施していない」と回答しており、約4人に3人の教員が外部関係機関と定期的な連携による対応をしていないことが明らかとなった。このことから、組織としての支援体制や関係機関と連携がうまく機能できていないケースも少なくないことがうかがわれる。

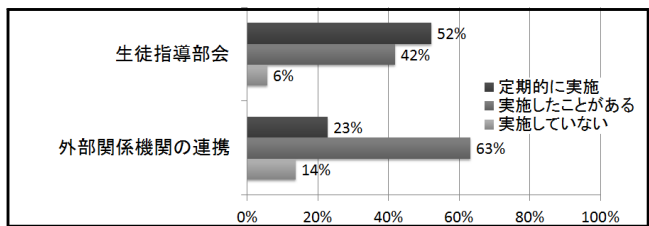


図2 長期化している児童生徒への対応(連携)

上記の調査結果から、組織による連携した対応ができていない学校とできていない学校とに二極化している実態があり、組織による対応ができていない学校では、担任や一部の教員が「有効な手立てが見付からない。」「関係機関とどのように連携すればよいのか分からない。」など支援策に不安を感じたり行き詰まったりして積極的に取り組めない状況や、担任と一部の教員間での情報交換がなされ、その場で支援策が検討されている状況をイメージさせられる。つまり、限定された教員間での支援体制になっており、複数の支援者が連携して対応をしたり、関係機関につないで支援したりする支援体制としてのシステム化・機能化がされておらず、このことが長期化している不登校児童生徒を支援する課題の一つになっていると考えられる。

#### 4 長期化している不登校児童生徒への校内支援体制モデルの検討

実態調査の結果や本課における相談事例の実践等から、学校内・家庭・関係機関が機能的に連携して対応する校内支援体制モデルについて考える。

長期化している不登校対応の校内支援体制とは、該当する児童生徒と関わりの少ない教員や専門的な立場から支援する関係機関の支援者がチームとして参加する支援体制である（この支援体制は初期対応時の対応チームと区別するために校内支援チームとする）。以下の図3・図4は、相談事例の校内支援チームでの話し合いの一場面である。図3は、学年部からの現状報告を受け、今後の対応の方針を検討している場面である。ここでは、家庭訪問、養護教諭の支援の協力、保護者と連携して支援策を協議する提案がされている。また、図4は、関係機関との連携の提案がされ、本人・保護者の承諾の確認ができたなら校長が相談機関に電話をするといった方針が決まっていく場面である。

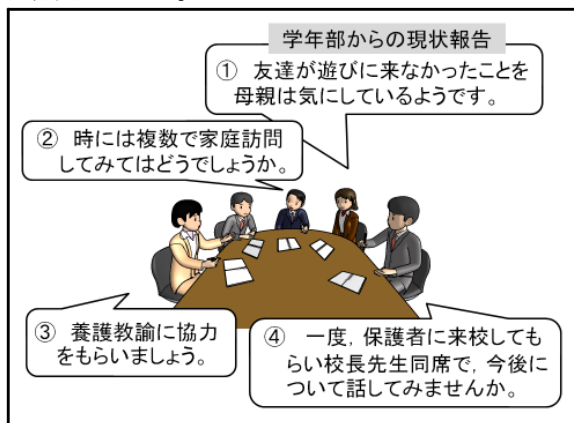


図3 支援策について協議する場面



図4 関係機関との連携を協議する場面

このように、校内支援チームでの検討は、支援者同士で具体的な支援案を立案することが重要である。支援者間の話し合いにおいては、不登校の児童生徒ができていないところを話題にするのではなく、図5に示すように、児童生徒が興味関心をもっているところ、長所、できているところなどの資源から支援策を考えていくことが大切になる。支援策を協議する際において、支援者同士で有効な情報や指導のポイントを積極的に伝え合うことは、アセスメントや指導・援助方針

を見直し、児童生徒の理解をより深めることになり、また、支援者にとって、支援者自身のモチベーションを高める機会になることが教育心理学の先行研究\*で確認されている。

また、コンサルテーションとは、支援者が教育や心理の専門性を備えた研究者や関係機関の専門家から児童生徒についての見方、関わり方などの確かな助言をしてもらうことである。校内支援体制では、様々な立場にある支援者同士がお互いに助言し合う双方向的なコンサルテーションをする関係にあることから、ここではこのような関係を相互コンサルテーションとする。図6は、担任と教育相談の担当が不登校の児童生徒の対応を助言し合う相互コンサルテーションの関係を示している。相互コンサルテーションでは、まず支援者同士がお互いを認め合う関係を築き、信頼関係の下、「共に支援していこう」という連携意識を高めることが重要である。

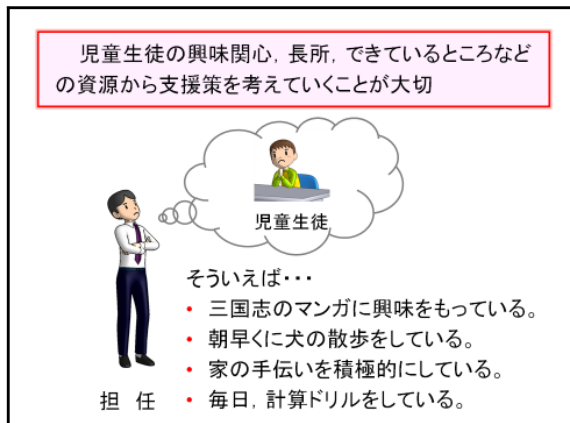


図5 資源からの支援策

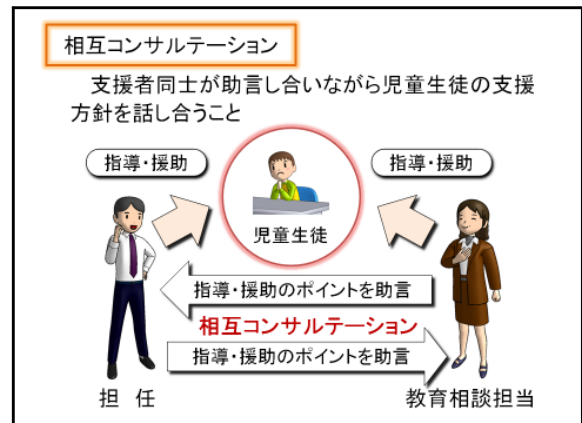


図6 相互コンサルテーションの場面

さらに複数の支援者が機能的に連携した支援をするには、ネットワークの中心となるコーディネーターの役割が不可欠となる(図7)。コーディネーターは、不登校児童生徒へ直接の支援ができ、チーム支援の共通目標や支援の状況を必要に応じてメンバーに伝えたり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと積極的に関わったりすることが求められる(図8)。一方、チームのメンバーは、不登校児童生徒と関わって得た情報をコーディネーターに伝えたり、不登校児童生徒に関わる前にコーディネーターから状況を聞いたりして適切な支援を行うことが大切となる。

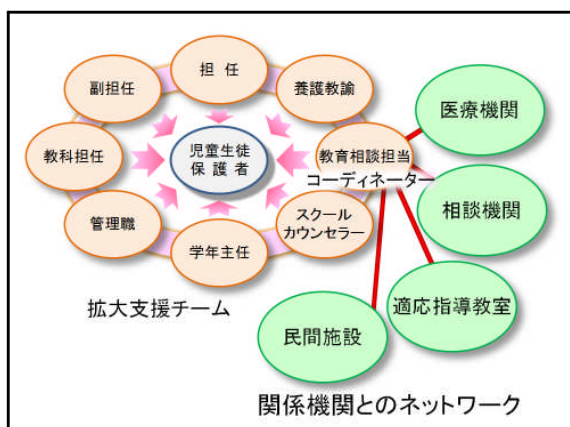


図7 校内支援体制モデル

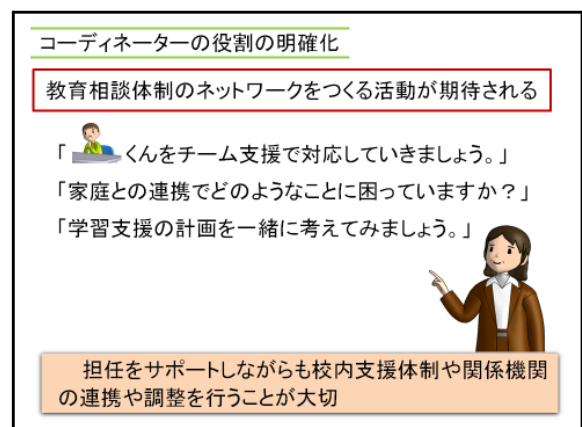


図8 コーディネーターに求められる役割

\* 家近早苗・石隈利紀 「中学校のコーディネーション委員会のコンサルテーションおよび相互コンサルテーション機能の研究」 2007 教育心理学研究

しかし、長期化している不登校児童生徒数が複数の場合、コーディネーターが機能しなくなることが予想される。コーディネーターは、不登校児童生徒のそれぞれのチームに存在する方が機能的な支援体制を確立できると考えられ、教育相談係会や不登校対策委員会等のメンバーが各チームのコーディネーター役を担うことが望ましい（図9）。学校全体で長期化している不登校児童生徒を支援していくための留意点は、定期的に会議を行い、支援策を協議することである（図10）。このように、委員会等で定期的に会議をもち、長期欠席した児童生徒の支援策を検討していくことが大事であり、定期的な会議によって、校内外の支援を幅広く集められ、活用できる体制になると期待される。

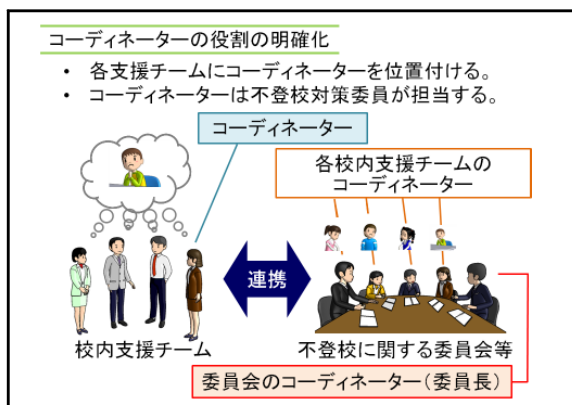


図9 各校内支援チームのコーディネーターによる委員会



図10 校内支援体制の留意点

## 5 成果と課題

### 〔成果〕

- 実態調査により、長期欠席した児童生徒を校内組織や関係機関と連携する対応が二極化している実態が明らかとなった。
- 長期化している不登校児童生徒の支援には、コーディネーターを中心とする校内支援体制及び関係機関との連携が重要であり、モデルの一例を検討できた。

### 〔課題〕

- 長期に係る不登校対応モデルを作成するために、さらなる事例収集と分析、検討が必要である。

## 【平成26年度調査研究発表会】

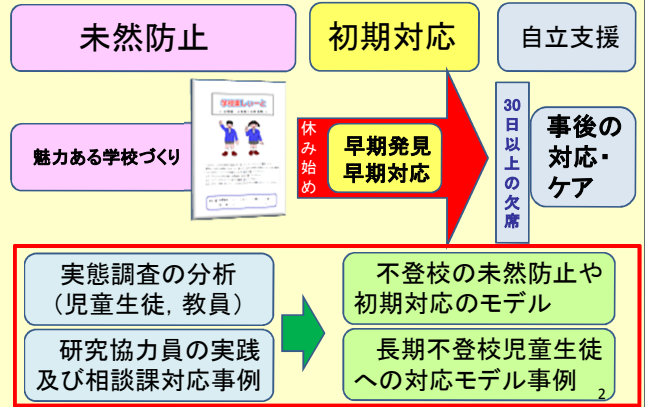
第8分科会（教育相談）研究発表

### 不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究 ～「学校楽しいと」等を活用した児童生徒への対応～

鹿児島県総合教育センター

1

## 不登校への対応

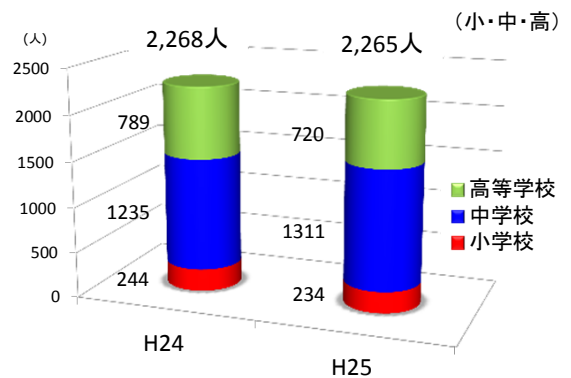


## 発表内容

- 1 研究のねらい
- 2 実態調査と分析
- 3 校内支援体制モデルの検討
- 4 成果と課題

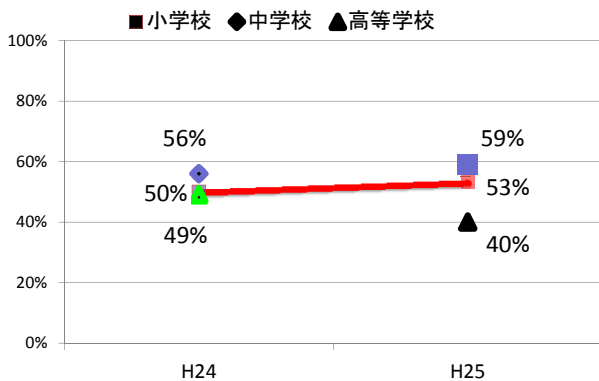
3

## 本県公立学校の不登校児童生徒数



文部科学省「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果<sub>4</sub>

## 本県の不登校継続率〔H24～H25〕



平成24・25年度 児童生徒の問題行動等の諸問題に関する調査結果より 5

## 1 研究のねらい

- (1) 教員を対象とした実態調査から、長期化している不登校児童生徒への指導・援助の在り方を分析し、校内支援体制の課題を考察
- (2) 本課における相談事例の実践等を通して、学校・家庭・関係機関が機能的に連携して対応する校内支援体制モデルを検討

6

## 発表内容

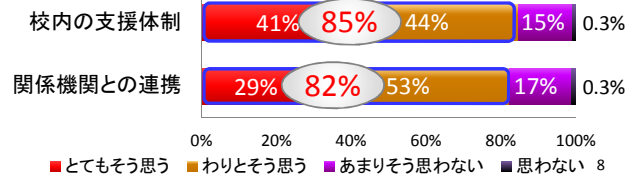
- 1 研究のねらい
- 2 実態調査と分析
- 3 校内支援体制モデルの検討
- 4 成果と課題

7

## 実態調査 調査実施期間：平成25年8月～10月

校種	回答教員数(人)
小学校	694
中学校	346
高校	269
合計	1,309人

不登校対応で困っていること、課題だと考えることは？



## 実態調査 調査実施期間：平成25年8月～10月

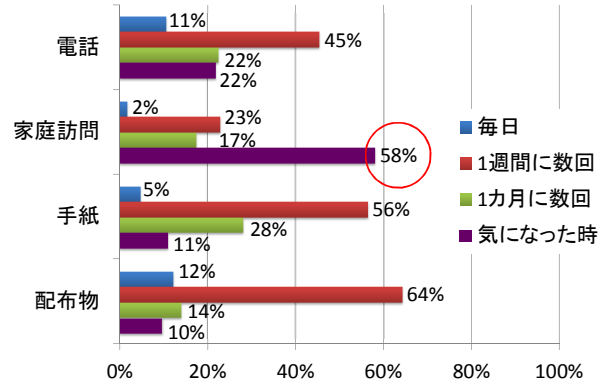
校種	回答教員数(人)
小学校	694
中学校	346
高校	269
合計	1,309人

60日以上欠席した児童生徒と関わった経験のある教員

校種	回答教員数(人)
小学校	303
中学校	298
高校	183
合計	784人

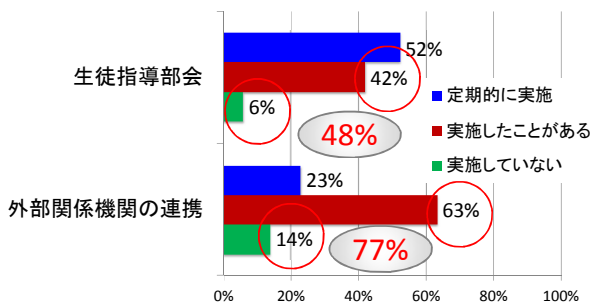
9

## 60日以上欠席している児童生徒への対応は？



10

## 60日以上欠席している児童生徒への対応は？



11

## 校内支援体制の課題

### 実態調査の結果

- ほとんどの教員は、長期化している不登校の児童生徒の対応には「組織による校内支援体制」や「関係機関と連携した対応」に課題をもっている。
- 実態は、組織による連携した対応ができていない学校と二極化している。

12

## 発表内容

- 1 研究のねらい
- 2 実態調査と分析
- 3 校内支援体制モデルの検討
- 4 成果と課題

13

小学3年A。インフルエンザにかかり1週間欠席した後、体調が回復しても登校できなくなった。

↓ 欠席10日後

- 学年部を中心にした支援チームを編成。

↓ 1か月後

- 校内支援チーム編成を経て、全職員にAの状況を周知し、支援方針を共通理解。



14

### 校内支援チームの場面

学年部からの現状報告

友達が遊びに来なかったことを母親は気にしているようです。

時には複数で家庭訪問してみてもどうでしょうか。



養護教諭に協力をもらいましょう。

一度、保護者に来校してもらい校長先生同席で、今後について話してみませんか。

15

### 校内支援チームの支援策

- 担任が保護者に今後の支援方針を説明する。⇒共通実践の確認
- 担任・スクールソーシャルワーカーが家庭訪問をし、別室登校を働き掛ける。
- 全職員で別室登校をサポートする。
- 夏季休業中も担任を中心に全職員で関わりをもつ。

- 2学期から登校できるようになる。



16

中学2年B子。父親の転勤により、中学1年3学期から転入した。2月下旬より週に1～2日の欠席。県外からの転入であったため、ことばやイントネーションの違いになじめず、友達もほとんどいない状態である。中学2年に進級してからは始業式しか登校しておらず、保護者は学習面の遅れを気にしている。担任とは信頼関係ができていない。

↓ 欠席2週間後

学年部を中心にした支援チームを編成。

↓ 1か月後

校内支援チーム編成を経て、チーム支援方法を協議し、相談機関との連携を検討。



17

### 校内支援チームの場面

以前よりコミュニケーションが取れるようになってきたのですが、女性の先生の方が話しやすいところがあるようです。先生、家庭訪問に同席してもらえないですか？



分かりました。一緒に行きましょう。

18

校内支援チームの場面

関係機関と連携を図る方法もあるのでは？

分かりました。電話してみましょう。

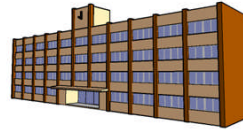


ひょっとしたら、学校に話せないことがあるかもしれません。最初に、私の方から本人・保護者に相談機関について紹介してみます。承諾を得られましたら、校長先生から相談機関にお電話していただけないでしょうか。

校内支援チームの支援

- 複数の教員で家庭訪問を実施する。
- 管理職から相談機関へ連絡する。

学校と相談機関の連携



学校



相談機関

相談機関による支援

- 本人・保護者との教育相談を実施する。
- 学校へB子の支援についてポイントを助言する。

■ 学校と信頼関係を築くことができるようになる




校内支援体制を機能的にするために大切なことは？



担任



教育相談担当

私なりに、くんが登校できるようにいろいろ考えているのですが…。何しろ、ずっと休んでいますから。ときどき、家庭に原因があるのかと思うんです。そして、家庭訪問をして、本人に会えたとしても、どんな声掛けをしてよいものかと悩んでいます。



担任



教育相談担当

そうですね。先生が思われるように、家庭に原因があるのかもしれないですね。

どうしようもないですね。このまま様子を見るしかないですね。



担任



教育相談担当



児童生徒の興味関心、長所、できているところなどの資源から支援策を考えていくことが大切



そういえば...

- 三国志のマンガに興味をもっている。
- 朝早くに犬の散歩をしている。
- 家の手伝いを積極的にしている。
- 毎日、計算ドリルをしている。

担任

25

私なりに、くんが登校できるように考えているのですが...。何しろ、ずっと休んでいますから。ときどき、家庭に原因があるのかと思うんです。そして、家庭訪問をして、本人に会えたとしても、どんな声掛けをしてよいのかと悩みます。



担任



教育相談担当

26

そうですか。どう対応すべきか悩まれていますね。先生、くんの長所はどこでしょう？何か保護者の方から聞いていませんか？

えっ...、そうですね。家庭では自分からよく手伝いをしているようです。



担任



教育相談担当

27

くんの長所ですね。手伝いができているところを認めてあげることがとても大切です。家庭訪問をしたときに、手伝いのことを話してください。

なるほど...。できているところを認めてあげる。分かりました。アドバイスありがとうございます。



担任



教育相談担当

28

周りから理解され受け入れられていると感じる

- 支援者の心理的負担を軽減する効果がある
- 同僚の批判を恐れずに表現が可能になる



29

家庭訪問したらいろいろと話ができて、今、ギターに興味をもっていることが分かりました。もし、くんが登校できたときはギターの話先生からもしてほしいのですが。

いいですよ。くんがいつからギターに興味をもつようになったか教えてください。

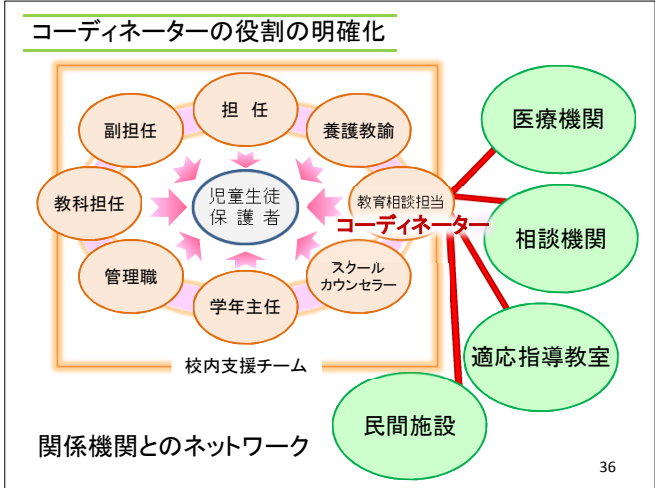
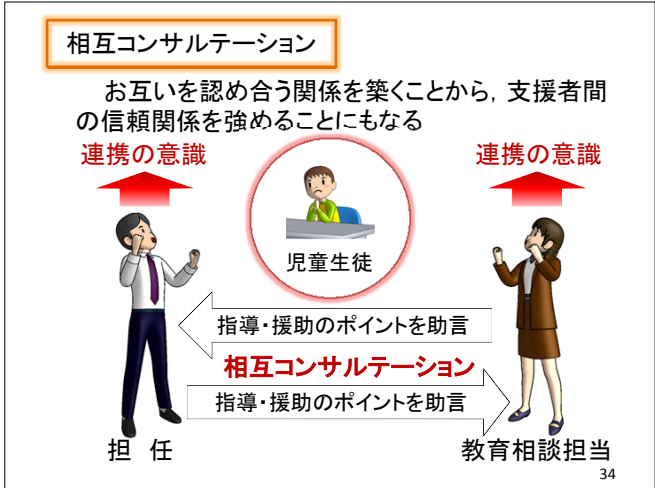
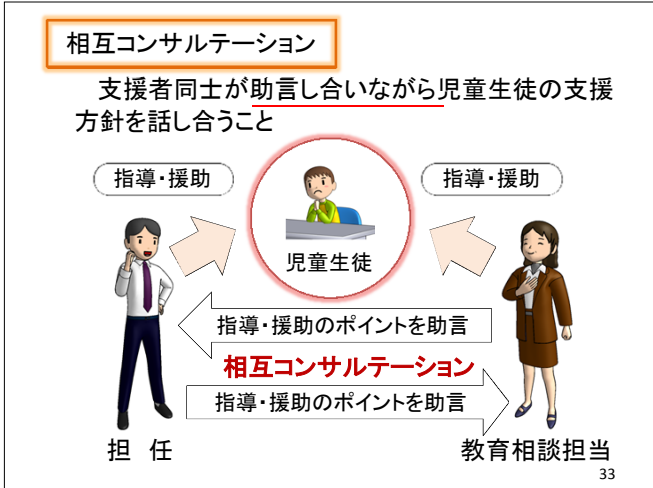
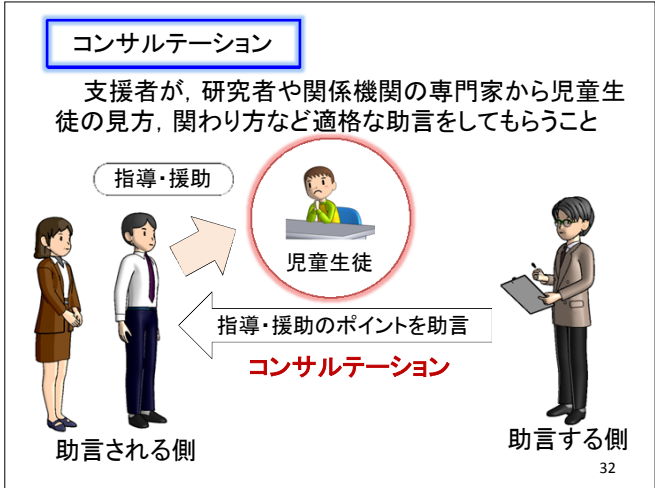
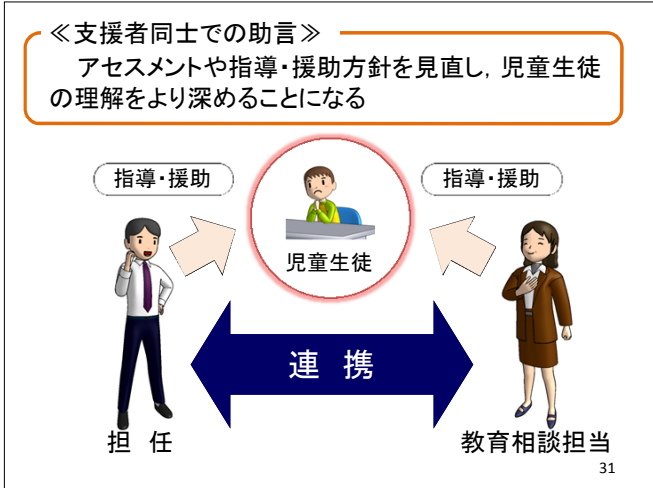


担任

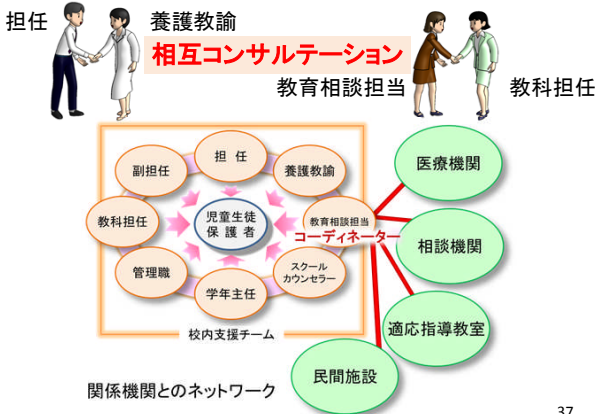


教育相談担当

30



コーディネーターの役割の明確化



コーディネーターの役割の明確化

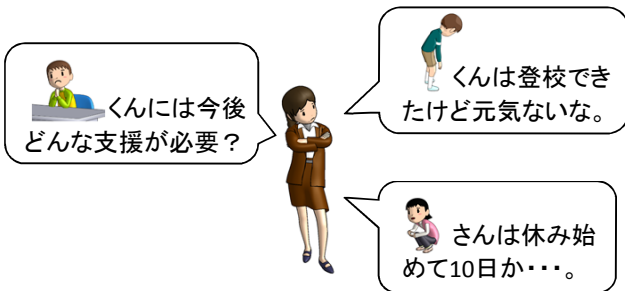
教育相談体制のネットワークをつくる活動が期待される

「くんをチーム支援で対応していきましょう。」  
 「家庭との連携でどのようなことに困っていますか？」  
 「学習支援の計画を一緒に考えてみましょう。」



担任をサポートしながらも校内支援体制や関係機関の連携や調整を行うことが大切

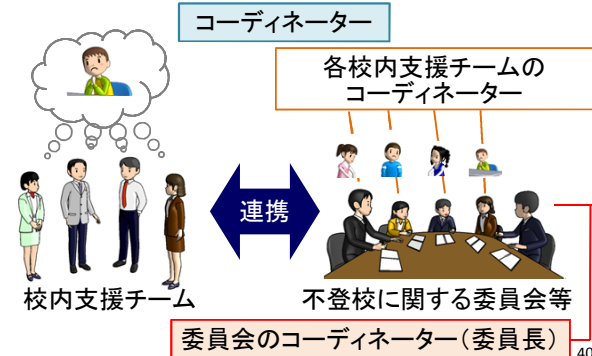
コーディネーターの役割の明確化



長期化している不登校児童生徒が複数おり、コーディネーターが機能しなくなることも…

コーディネーターの役割の明確化

- 各支援チームにコーディネーターを位置付ける。
- コーディネーターは不登校対策委員が担当する。



不登校に関する委員会等



各支援チームのコーディネーターによる委員会等

恒常的・継続的に機能する校内支援体制



## 発表内容

- 1 研究のねらい
- 2 実態調査と分析
- 3 校内支援体制モデルの検討
- 4 成果と課題

43

## 成果

- 実態調査より、不登校の児童生徒の対応には「組織による校内支援体制」や「関係機関と連携した対応」に課題をもっているが、実践できている学校とできていない学校と二極化していることが明らかとなった。
- 長期化している不登校児童生徒の支援には、コーディネーターを中心とする校内支援体制が重要であり、そのモデルを検討した。

## 課題

- 長期化している不登校対応について、さらなる事例収集と分析、検討が必要である。

44

## 【平成26年度調査研究発表会】

第8分科会（教育相談）研究発表

不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究  
～「学校楽しいと」等を活用した児童生徒への対応～

 鹿児島県総合教育センター

45

## 小学校における不登校の未然防止と指導・援助の実際

肝付町立高山小学校

教諭 寺田 繁樹

### はじめに

本校は、大隅半島の中央部肝付町の高山地区に位置し、創立142年の歴史を誇る学校である。また、学校の規模は、児童数443名で、1～3年が各3学級、4～6年が各2学級あり、職員は31名である。本校では「豊かな心と進んで学ぶ力を備え、たくましく行動する高山っ子を育てる」という学校教育目標を目指し、日々教育活動に励んでいる。

一昨年、前任地から本校へ異動し、6年生の担任となった。その学級に5年生の頃から不登校となっていた児童がいた。始業式の日午後のみ登校し、それ以降は、全く登校できない日々が続いた。毎日の朝夕の家庭訪問、夏休みの個別指導、特別支援教室への登校、校長室での給食を経て、2学期の修学旅行から登校できるようになり、中学2年生となった今では、毎日、元気に登校しているようである。不登校解消は、たいへん難しい。担任にとっても、その本人にとっても同様である。この時も、本人の努力と関係する多くの方々のお陰で解消することができたに過ぎないと思っている。だからこそ余計、大切なのは、今回のテーマとなっている「未然防止」と「初期対応」であると考えている。そして、それは自分の学級だけでなく、学年全体、学校全体で対応していかなければならない課題でもある。

そこで、本分科会のテーマである「不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究」について「学校楽しいーと」と「チーム支援シート」を活用した本校6年生における取組について述べる。

## 1 第6学年の児童の実態と生徒指導上の課題

### (1) 児童の実態

- 元気に学校生活を送り、表立った不登校傾向の児童はいない。
- 行事を通していく中で、高学年としての自覚が芽生え始めている。
- 決められた仕事を確実に行う女子、元気で活発な男子が多い。

### (2) 生徒指導上の課題

- より緻密な児童理解を進める必要がある。
- 保護者との連携をより密に進める必要がある。
- 経験年数の少ない先生が多く、不登校対応や保護者との連携において経験が浅いことから、学年・学校での連携を進める必要がある。

## 2 実践内容

### (1) 児童理解について

#### ア 学級集団用「学校楽しいーと」の結果

本学級の児童は、「心身の状態」(11.5) 以外は、県平均を下回り、その中でも特に、「教師との関係」(10.0)、「自己肯定感」(10.1)、「学級集団における適応感」(12.3)の3点については、大きく下回っている状態であった(表1, 図1)。

表1 A組（学級集団）における「学校楽しいーと」結果

	県平均	学年平均	A組	県平均との差
友達との関係	13.3	13.2	12.9	-0.4
教師との関係	12.2	10.7	<b>10.0</b>	<b>-2.2</b>
学習意欲	13.3	11.9	11.5	-1.8
自己肯定感	12.3	10.7	<b>10.1</b>	<b>-2.2</b>
心身の状態	11.3	11.3	11.5	+0.2
学級集団における適応感	14.0	12.8	<b>12.3</b>	<b>-1.7</b>

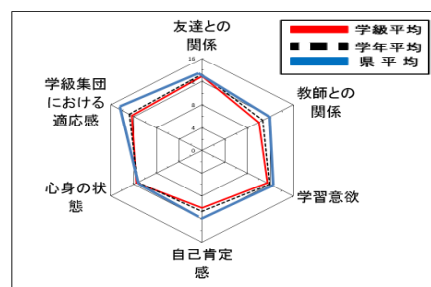


図1 学級集団の「学校楽しいーと」結果

イ 集団用「学校楽しいーと」分析シートの活用

「学校楽しいーと」の結果（表1，図1）を受け，本学級（A組）の「ストロングポイント」，「ウィークポイント」，「資源（リソース）」，「阻害する要因」を分析し，結果を図2に示す。

(ア) 資源（リソース）

○ 校内でのサポート体制

担任は，本校が初任校の教諭である。普段から意欲的に学級経営に取り組んでおり，他の先生方のアドバイスも素直に聞き入れることができる。学校全体で若い先生方を育てていこうという雰囲気があり，そのサポート体制も整っている。

○ 保護者の協力体制

担任が初めての高学年担任ということもあり，学級の保護者全体で担任を支えようという雰囲気がある。

(イ) 阻害する要因

○ 担任の経験不足

初任校ということもあり，学級経営や不登校対策において経験不足は否めない。

○ 兄弟姉妹関係の影響

中学，高校に兄弟姉妹がいる場合，その影響を大きく受けている状況がある。

(2) 自己肯定感を高めるための授業実践（道徳「命をみつめて」 資料 学研「みんなのどうとく」）

ア ねらい

生命には終わりがあり，限りある生命だからこそ，精一杯生きようとする態度を育てる。

イ 授業の実際（1／1）

過程	主な学習活動 児童の考え	時間	指導上の留意点
導入	1 「本当の幸せ」とは何かについて考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">                     ・ 自分のやりたいことができること。                      ・ 毎日，楽しく過ごすこと。                      ・ 家族と一緒にいること。                 </div>	10	○ 猿渡瞳さんの弁論大会の最初の部分を聞かせ，本当の幸せについて考えさせる。  ○ 猿渡瞳さんの弁論大会の言葉から本時のめあてに繋げる。
	2 本時のめあてを設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     今，生きている私達は，どのように過ごしていくことが大切だろうか。                 </div>		
	3 資料「命をみつめて」を読み，瞳さんの気持ちについて話し合う。		○ 話し合いたい場面を，自分たちで考えることで，より主人公の気持ちに共感できるようにする。

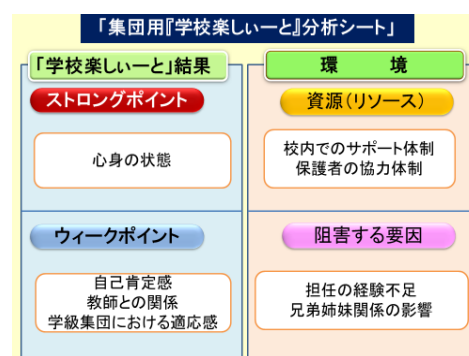


図2 集団用「学校楽しいーと」分析シート

展 開	(1) 「がん」と分かった時の瞳さんの気持ちを考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 死ぬかもしれない。こわい。</li> <li>・ なぜ、私のがんにならないといけないの。くやしい。</li> <li>・ 死にたくない。</li> <li>・ 絶対にがんに勝ってみせる。</li> </ul> </div>	8	○ 「がん」の病気についての補足説明を行い、瞳さんが「死」とどういう気持ちで向かい合っているか考えさせる。
	(2) 瞳さんが弁論大会へ向けて頑張ることができた理由を考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 病気に負けたくない。</li> <li>② 家族に頑張っている姿を見せたい。</li> <li>③ 世の中の人に「本当の幸せとは何か」を伝えたい。</li> </ul> </div>	10	○ 発問(2)について、小グループで話し合うことで、自分の考えを補充・深化させる。 ○ 小集団での話し合いに入る前に、各班リーダーに「なぜそう思ったのか。」等の質問をするように助言する。 ○ 頑張るための様々な思いに気付かせるために、以下の観点で類型化を行う。 ① 「自分自身を中心とした考え方」 ② 「他者への思いを中心とした考え方」 ③ 「社会や将来へ向けた考え方」
	(3) 「今、生きている」の「今」には、どういう意味が込められているのか考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>今、頑張ることが大切だという意味。 今を大切にしないといけないという意味。</p> </div>	10	○ 「死」を見つめることで、「今」が大切であることに理解させる。
終 末	4 これまでの生活を振り返り、「今、生きている」自分を見つめる。	7	○ 自分たちにも輝いている瞬間があることに気付かせ、今後の活動への意欲をもたせる。
	5 日常生活で頑張っている自分たちの写真を見せることで本時のまとめをする。		

(3) チーム支援

ア 基礎情報の収集と分類

前年度の欠席状況を確認すると、「二次サポート群」に該当する児童は2名であった(表2)。

Aは、欠席が41日あり、

表2 本学級「二次サポート群」に該当する児童の欠席状況

「年間30日以上欠席」の「不登校」に該当する児童ともいえる。しかし、欠席理由は、腹痛や頭痛、通院などが主であり、通常ならば、「病気」として対応してしまう児童でもある。

児童名	欠席日数	欠席理由	特記事項
A	41日	腹痛13, 頭痛10, 通院9, 怪我2, 発熱7,	症状が軽くても欠席する傾向
B	11日	風邪9, 頭痛2	少年団の試合後に欠席する傾向

Bは、欠席日数は11日であり、不登校該当の児童ではないため、これまでであれば特に不登校の対象としては注意を払わなかった児童である。今回、「二次サポート群」に該当したことで、前担任より話を聞いてみると、特に、土、日の少年団の試合後に欠席する傾向が見受けられた。

イ 「チーム支援シート」の活用

(ア) 「チーム支援シート」による分析

「学校楽しいと」の学級集団分析の結果を受け、担任の経験不足を補うために、学年全体でチームを組み、実践に取り組むことにした。対象の2名の児童について、「チーム支援シート」を記入し、より深い分析を行った。特に保護者との連携については、学校全体の課題でもありと考え、項目を増やし(表3)、重点的に行った。

表3 本校における「チーム支援シート」内の基本情報「保護者との連携」の追加情報

<p>11 保護者との連携</p> <p>家庭内会話 ◆会話多い</p> <p>家庭の様子 ◆問題なし</p> <p>兄弟関係 ◆兄：中学生 不登校傾向</p> <p>状況理解 ○△×</p> <p>信頼関係・児童 ○△×</p> <p>信頼関係・保護者 ○△×</p>	<p>&lt;本校における「保護者との連携」追加情報の注釈&gt;</p> <p><b>兄弟関係</b>：気になる兄弟姉妹関係の状況を記入する。例えば、中学生時に不登校傾向であったことや兄弟の仕事の有無、同居の有無等について本児への影響が考えられる状況を記す。</p> <p><b>状況理解</b>：保護者が、本児の不登校（欠席）の状況を理解しているかどうかを記入する。○：しっかりと理解している △：薄々感じている ×：我が子は不登校でないと考えている</p> <p><b>信頼関係・児童</b>：担任と本児との信頼関係について記入する。○：困ったことがある時に担任に相談できる △：声を掛けると話ができる ×：担任と話しようとしていない</p> <p><b>信頼関係・保護者</b>：保護者と担任との信頼関係について記入する。○：困ったことがある時に担任に相談できる △：電話を掛けると、話ができる ×：担任と話しようとしていない</p>
---	---

(イ) 指導・援助方針の設定

「基本情報」, 「資源」, 「見立て」を基に, チームで対象児童の「指導・援助方針」を設定した(表4, 表5)。

表4 Aに対する指導・援助方針

指導・援助方針	誰が	何を	機会
① 自己肯定感を高める授業	担任 学年部	自分のよさや、頑張っている自分に気付かせる働き掛け	学活、道徳
② 基礎学力の定着	担任	家庭学習用プリント作成、テストへ向けた目標設定	家庭学習、教育相談

<① 自己肯定感を高める授業>  
自分のよさに気付いていない、気付こうとしていないので、自分のよさに気付くことができる授業を行う。自分にもよいところがたくさんあると気付かせることで、自信をもって学校生活を送れるようになるを考える。

<② 基礎学力の定着>  
「自分はできない。」「頑張っても無駄だ。」という意識を払拭させるために、個別のプリントを準備し、基本的内容の確実な理解を進めて、テストに対する目標を設定させる。周りと比較させるのではなく、自分自身の成長を意識させるように教育相談を実施する。

表5 Bに対する指導・援助方針

指導・援助方針	誰が	何を	機会
① 自己肯定感を高める授業	担任 学年部	自分のよさや、頑張っている自分に気付かせる働き掛け	学活、道徳
② 保護者との信頼関係の構築	担任	本人のよさや努力していることを伝える働き掛け	家庭訪問、電話連絡

<① 自己肯定感を高める授業>  
担任から本人への「認められる機会」を多くもたせることで、自分のよさに気付かせ、「今の自分とてよい」という安心感をもたせ、友達への肯定的な理解を促すようにする。

<② 保護者との信頼関係の構築>  
トラブルが生じる度に保護者へ電話連絡をしていたが、担任として、本人のプラス面を積極的に伝えるようにする。

(4) 成果と課題

ア 成果

「学校楽しいーと」や「チーム支援シート」を活用することで、児童の実態を的確に把握することができ、授業づくりなど組織的に取り組むことで、より効果的に支援することができた。

イ 課題

取組の成果を見極めるため、本年度だけの分析だけではなく、小中連携を通じた来年度、再来年度の分析が重要であるため、より一層、具体的な小中連携を進めていく必要がある。



## 中学校における不登校の未然防止と指導・援助の実際

鹿児島市立吉野中学校  
教諭 長野 素子

## 1 はじめに

鹿児島市北東部に位置する本校は、学年各7学級、特別支援学級2学級の計23学級、全校生徒805名からなる大規模校である。豊かな自然に囲まれた本校区であるが、ここ数年、区画整理の影響で急速に都市化が進み、生徒を巡る環境は大きく様変わりしている。そのような環境的要因に加え、地域の人口増加に伴う生徒数の増加によって、問題行動等を起こす生徒や不登校状態に陥る生徒の数も相対的に増えてきている。

そのような状況において、教師が一人一人の生徒の人格の価値を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めるように指導・援助することができるよう、本校では昨年度から「生徒が豊かな心をもち、自立するためにはどうすればよいか」を主題に、生徒の心を耕す道德教育の在り方について研究を進めている。その推進に当たっては、生徒理解を深めるとともに、個に応じた積極的生徒指導を充実させるための一つの手立てとして「学校楽しいーと」を、さらに不登校状態にある生徒の対応の一つとして「チーム支援シート」を活用している。

そこで、「学校楽しいーと」及び「チーム支援シート」を活用した、本校における不登校の未然防止と指導・援助の実際について述べる。

## 2 本校における生徒指導上の課題

本校は、全体としては概ね落ち着いた状況にあり、大多数の生徒は、学校行事や部活動などへ熱心に取り組んでいる。しかし、今年度は、学校内外での問題行動等の発生件数は昨年度より格段に増えている。これは、昨年度に比べて生徒数が50名ほど増えたことで、生徒一人一人に教師の注意が十分に行き届きにくい状況が生まれ、問題を抱える生徒への気付きや対応に遅れが出てしまったことが影響していると考えられる。また、他地域からの転入生が大規模集団や新しい環境に馴染めず悩んだり、トラブルを起こしたりするケースも見られた。さらに、自己表現がうまくできず、人間関係づくりが苦手で、本来、特別な配慮や支援を必要とする生徒が、大規模集団の中で見過ごされがちな面もある。そのため、昨年度まで減少傾向にあった不登校傾向の生徒数はわずかながら増加する傾向にあり、当教育センターが定義する「一次サポート群」に該当する生徒は70名、「二次サポート群」に該当する生徒は13名にも上る。

そこで、教師が生徒一人一人の生徒理解を深めるとともに、学校・学級、友人関係等における生徒の現状を把握し、不登校状態につながる生徒の様々な問題の未然防止と早期解決のための手立てとして「学校楽しいーと」を活用した。さらに、「学校楽しいーと」をより効果的に活用するために、生徒を欠席状況に応じて「一次サポート群」、「二次サポート群」にグループ分けし、初期対応を迅速に行うためのサポート体制づくりを行った。

## 3 実践内容

## (1) 生徒の心を耕す道德教育の実践

本校では、生徒が健やかで充実した生活を送ることができるよう、「生きる力」の核となる豊かな人間性を培う手立ての一つとして、道德教育の更なる充実を図っている。まず、職員の資質向上を目指した職員研修の実施



である。5月には、よりよく生きるために理想をもち、その実現に向けて努力することを主題とした道徳教育の研究授業を実施した。その際、道徳教育の先進校から講師を招聘し、全職員で参観した上で授業研究を行うとともに、道徳教育の進め方について講話をいただいた。その研修を受け、6月の日曜授業参観では、道徳教育の年間指導計画と生徒の実態に応じて学年ごとに主題を設定し、その主題に合わせた同一の題材で全担任が道徳を実施した。その後、学年ごとに授業研究を行うことで、各学年が抱える課題について再確認し、生徒の道徳心の向上を図るための手立てについて考察することができた。

また、11月にはフレッシュ研修で実施した道徳を全職員で参観した上で、ワークショップ型授業検討会を実施し、初任者への助言を通して、自らの教育実践を反省する機会をもった。

これらの実践を通して、本校の生徒の多くは将来への夢や希望をもちながらも、自分に自信がもてず、目標達成が無理だと諦めてしまったり、楽な方に流されたりする傾向があることが分かった。

## (2) 「心の教育」の推進と積極的生徒指導の充実

生徒の道徳性を養うための手立ての一つとして、心の教育全体計画を作成し、その実践に努めている。生徒一人一人の心身の健やかな成長が、自他共に尊重し、円滑な人間関係を築くことに結び付き、不登校につながるいじめ等の問題を未然に防止できる。今年度、本校では、東日本大震災で被災した東北地方を支援するために生徒会を中心にさつまいもを栽培し、岩手県大船渡市の中学校8校に届ける活動を行った。その活動や交流を通して、生徒は、中学生が実際にできる等身大の支援とは何かを深く考え、人と人が互いに支え合い、分かち合うことの大切さについて知ることができた。



全教職員が参加する「心の教育推進委員会」を年6回実施し、支援や配慮を必要とする生徒について、その現状や支援の在り方などの多面的な理解と情報交換を行っている。生徒の状況は、学校行事や部活動等、様々な状況において日々変化する。そこで、学習面や生活面、健康面など、様々な観点から生徒を捉え、実態把握に努めるとともに、学級・学年の枠を越え、様々な立場からの支援の在り方について検討している。

また、本校では、特別な支援を必要とする生徒に対し、各教師が教科の枠を越えて協力し合う、T・T体制や個別での学習支援を実施している。本校の3年生には、受験期が近づくにつれ、学習への不安から欠席や遅刻、早退を繰り返す生徒が増える傾向が見られる。そこで、スクールカウンセラーの教育相談等も活用しながら、生徒のつまずきに対して具体的な学習支援を実施するなど、特別支援教育からの体制づくりにも力を入れている。そして、「学校楽しいーと」や諸調査の結果から本人にいじめに関わる事態がないか、いじめが発生した場合は、その実態がどのようなものであったかを正確に把握するために、本校のいじめ防止基本方針に則って、「いじめ聞き取りシート」を作成した。

## (3) 「学校楽しいーと」による生徒の実態把握（5月・10月）

本校では、修学旅行等、学年別の学校行事が実施される5月には、新しい学級集団での状況を把握するために、夏休みや体育大会などの学校行事を終える10月には、学級の状況や生徒の人間関係等に変化が見られることから、年2回、「学校楽しいーと」を実施している。

本校の生徒は、どの項目も県平均と同程度か上回っている。特に、1年生については、全ての項目が県平均を上回っており、生徒の置かれている状況が比較的良好であることが分かる。3年生については、5月よりも10月のポイントが向上しているが、これは、中学校生活最後の行事に意欲的に取り組めたことから、学校や学級の一員としての所属意識が増し、充実した学校生活を送ることができているものと考えられる。

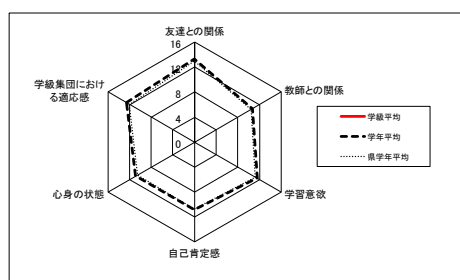


図1 2年生（5月）

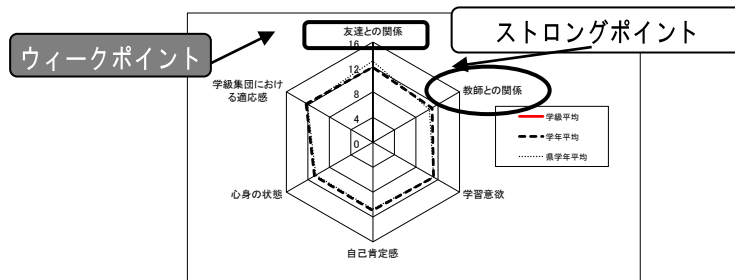


図2 2年生（10月）

しかし、2年生は、5月（図1）に比べて10月（図2）のポイントが全体的に低下しており、特に「友達との関係」は県平均を下回っている。このことは、夏休み以降、問題行動や交友関係のトラブルなどが増加している現状にも顕著に現れていた。また、「学級集団における適応感」の項目もわずかながらポイントが低下しているが、2学期以降に行われた学校行事への取組の姿勢を見ても、学級集団としてのまとまりが弱まっていたことがあった。

「学校楽しいと」において全学年に共通しているストロングポイントは、「教師との関係」であった。生徒との信頼関係を強みにして、生徒が学校生活に不安を抱えたり自信を失ったりしたときに、適切な支援と援助ができるような体制づくりを行う必要があることを改めて確認した。

そこで、全校生徒の昨年度と今年度の出席状況を元に、「一次サポート群」と「二次サポート群」へのグループ分けを行うことで、支援や援助を必要とする対象生徒を把握できるようにした。職員は自分の所属する学年を中心に、対象となる生徒の状況を常に意識し、必要な時期に適切な対応ができるようにした。

(4) 「学校楽しいと」を活用した具体的な生徒への対応とその変容

5月中旬に実施した「学校楽しいと」を効果的に活用するために、全職員が参加しての職員研修を実施した。「学校楽しいと」の結果の分析には、諸調査の結果や教師による生徒観察、欠席・遅刻などの出席状況など多方面からの考察も加え、生徒の状況を正確に確認し、どのような指導や援助が必要か検討した。また、個々の生徒だけでなく、学校や学年、学級の状況把握や課題について確認するとともに、今後起こりうる問題についてもその対応策を協議し、共通理解を図った。

【生徒Aへの対応】

生徒Aは、物静かで控えめな性格の中学1年生の男子である。1学期半ば頃から学級内での交友関係に悩んでいたが、夏休みを挟んだ9月から「登校渋り」が見られるようになった。学級内に親しい友人がいないことや本校3年生の兄との関係があまり良好でないこともあり、一時は欠席が続いていたが、文化祭を機に少しずつ登校できるようになり、現在は欠席もほとんどなく登校できている。しかし、現在でも教室に入れず保健室などの別室で過ごしたり、午前中で早退したりする状況が続いている。サッカー部に所属しており、部活動や他の学級には仲良く過ごせる友人がいる。学級にも彼に対して言葉掛けや気遣いのできる生徒がいるので、現在はトラブルは起こっていない。本人にとっては、母親が良き理解者で、大きな支えになっている。

【「学校楽しいと」の結果による生徒Aの変容】

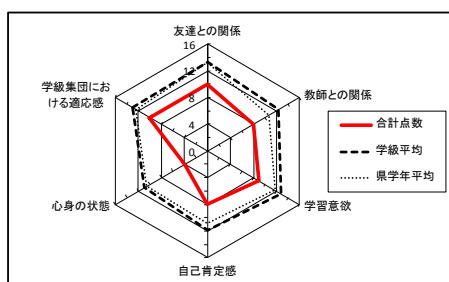


図3 生徒A（5月）

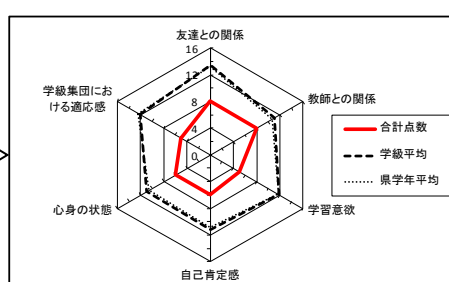


図4 生徒A（10月）

表1 6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	10	↘	8
教師との関係	8	→	8
学習意欲	9	↘	5
自己肯定感	8	↘	6
心身の状態	4	→	6
学級適応感	10	↘	5

ア 5月の結果の分析

全体的にポイントが低く、特に「心身の状態」のポイントが極端に低くなっている（図4）。このことから、学級内での交友関係のトラブルから生じた不安が全ての項目に影響を与えており、本人にとってはかなり大きな精神的ストレスになっていることが分かる。また、学習も得意ではないことから「学習意欲」も低く、なかなか自分に自信がもてないため「自己肯定感」も高くはない。家庭では、兄との関係があまり良好でないことから、家庭よりは学校での生活が楽であると考えており、そのことが他の項目に比べて「学級集団における適応感」や「友達との関係」のポイントが高くなっていることに表れている。

イ 指導・援助の方針

学年部や支援チームと連携を図りながら、本人への心の不安を解消・軽減することで、学校・学級への所属感を高め、仲間とともに円滑な学校生活が送れるように働き掛ける。

ウ 具体的な働き掛け

生徒Aは、学級内での交友関係のトラブルから学校生活に対して極度の不安と緊張を抱えており、登校を渋ったり学級に入れず保健室で過ごしたりすることが増えた。一方、家庭でも中学3年生の兄との関係が良好ではなく、兄から暴言等を投げ掛けられることがあり、落ち着かない状況にある。この生徒Aの兄は気弱な性格で、兄自身も同級生よりからかいの対象となることがあり、そのストレスを弟にぶつけて解消している傾向が見られた。

そこで、様々な要因から生じている心の不安を解消することを第一に考え、一日も早く学級に入ることを念頭に置いた指導・援助を試みた。

○ 「チーム支援シート」（図5）を作成し、生徒Aの状況を分析した。「学校楽しいと」の結果に担任の観察を加えることによって、生徒Aの抱える課題をより明確にすることができた。これによって、より具体的な支援・援助の体制づくりができた。

見立て  
人とのコミュニケーションが上手にとれず、他の人から話しかけては欲しいが、自分からは話しかけたくはないという考えをしているようである。学校・家庭双方において人間関係がうまくいっていないことから、自分に自信がもてず、また他人と触れ合いたいと思いつつも、積極的に関わることに不安を感じているのではないかと推察される。

○ 本人の状況が改善するまで、無理に教室に入れることをせず、別室での学習指導を行えるよう、支援体制の確立を図った。

指導・援助方針	誰が	何を	機会
① 学校・学級への所属感を高めるための働き掛け	担任 養護教諭 SC	・不安の解消（学校・家庭） ・生徒会活動における係分担	・保健室や相談室でのカウンセリング
② コミュニケーション能力を高めるための働き掛け	担任 学年主任 養護教諭 SC	・自己肯定感の向上 ・学級経営 ・学習習慣の定着	・生徒会活動 ・個別指導 ・普段の授業 ・学級活動

図5 チーム支援シートの一部

- 授業を受けないことによる学習不安を解消するために、職員が分担して個別支援を行った。
- 中学3年生の兄の担任や学年部とも連携を図って、関係の改善に努めた。
- 母親の負担を軽減し、困り感を解消するために、担任だけでなく、学年主任や養護教諭も関わりながら、学校からの連絡を密にした。
- 担任は構成的グループエンカウンター等を実施して、自他共に認め合う学級集団づくりを行うとともに、学年全体でも生徒への語り掛けを行って、自己有能感や学級への所属感を高めるよう取り組んだ。
- 本人の状況について職員間で共通理解を図るとともに、様々な教師が積極的に声掛けを行い、関わりをもつことを試みた。

## エ 10月の結果の分析

図4、表1のとおり、6観点中4観点においてポイントが低下するなど、全体的に値が低い。特に「学習意欲」や「学級集団における適応感」は、「5」と他の項目より低い値を示している。学級に入れないことで、学習へのつまずきや居心地の悪さを感じていると思われるので、個別の学習支援を今後も続け、本人の学力向上を図りたい。

「友達との関係」が若干低下しているが、部活動には友達がいるので、彼らの力を借りながら、今後、学校生活の中でさらに交友関係が広がり深まるような働き掛けが必要である。

「心身の状況」には改善が見られる。10月末の文化祭では学級の仲間と合唱に参加することができた。学校生活を通して様々な成功体験を味わわせることで、自分に自信をもたせるよう、働き掛けたい。

また、現在、不登校傾向は改善しているが、時折、不安定になることもあるので、今後も関係機関や職員と連携を図りながら、注意深く見守る必要がある。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

- 学校全体で「学校楽しいーと」を実施したことや欠席状況に応じて「一次サポート群」、「二次サポート群」にグループ分けをして支援体制を作ったことで、教師の「見取り」や諸調査の結果と合わせて、多角的・多面的に生徒個々の実態を把握することができた。さらに、生徒の実態をその項目に応じて系統立てて理解することに効果的であった。
- 「心の教育」全体計画を作成して実践したことや「学校楽しいーと」を実施したことで、教師間で共通理解を図りながら、個々の生徒に対して適切な指導・援助の在り方を具体的に考察することができた。また、「学校楽しいーと」の分析を通して、個別の事例だけでなく、学年・学級経営の振り返りを行うこともでき、指導・援助の示唆を得ることができた。
- 「学校楽しいーと」を年2回実施したことで、一人一人の生徒の変容を見ることができたとともに、その現状に応じてより適切な指導・援助へと軌道を修正することができた。

### (2) 課題

- 今年度は「学校楽しいーと」を年2回実施しているが、より深い生徒理解のためにも、今後も年次をまたいでデータを蓄積していくことが必要である。
- 不登校状態だけでなく、問題行動等を抱えた生徒についても「チーム支援シート」を積極的に活用し、職員で連携を図りながら支援・援助に努めたい。

## 高等学校における不登校の未然防止と指導・援助の実際

鹿児島県立末吉高等学校  
教諭 基本 晃一

### はじめに

本校は、大正10年（1921年）に末吉村立実科女学校として創設され、93年の歴史と伝統をもつ学校であるが、大隅地域の公立高校の再編に伴い、平成28年3月をもって閉校する。現在、2・3年各3学級、計6学級、全校生徒173名が在籍しており、曾於市内の中学校の出身者が全体の約84%を占め、都城の出身者は5%程である。

### 1 本校における生徒指導上の課題

#### (1) 生徒の実態

豊かな自然環境の中で過ごしている生徒たちは素直かつ純朴であり、各種行事への参加やボランティア活動を通じ、地域との交流や文化の継承にも力を入れている。

ところが、近年における核家族化の急速な進行や、携帯電話をはじめとする情報機器等の普及、さらに、集団体験活動を行う機会が減少している中、対人関係でのソーシャルスキルの未熟さが一因と見られる様々な不適応が生じている。デジタルネイティブ世代の生徒たちは、日常生活の中でネットスラングを巧みに操り、自分の実感を「短い言葉」で表現するのが主流となっている。そのためか、自分の考えを伝えることや、自分の立場をはっきりさせて意見を言うことが不十分なため、語彙の少なさや表現力の稚拙さにつながり、些細ないざござやコミュニケーションの行き違いなどをきっかけとしたトラブルが後を絶たない。さらに、携帯電話の無料アプリを使った対人関係が強まることで、直接対話ややりとりがなされる機会が減ってきている。

#### (2) 生徒指導の実践内容

##### ア コミュニケーション技術の習得

- ソーシャルスキルトレーニング（以下 SST という。）の実施

##### イ 三者連携の在り方

- 指導・対応方針の明確化
- 保護者との連携

##### ウ 信頼関係と的確な実態把握

- 「学校楽しいーと」の活用
- 出欠状況の集約・分析・区分
- 「チーム支援シート」を活用した個への指導・援助

### 2 実践内容

#### (1) コミュニケーション技術の習得（SSTの実施）

ホームルーム活動等を活用し、SSTを実施した。その内容は、最初に自己紹介をし、その後、決められたテーマに沿って会話を行うものである。その際、非言語的なメッセージや状況の手掛かりを利用し、他者の考えや意図・感情を読み取り、相手の全体的な人柄や性格の長所について前向きなコメントをする。これにより、日頃の自己の行動について気付きを促し、自他理解を深めながら信頼できる人間関係を育むことができるものと考えた。学級は個性や可能性をもったメンバーが集まるいわば家族のような存在であり、自分たちで問題を解決し、互いに支え合いながら生活する集団の一つである。そのため、教師と生徒が相互の良好な人間関係を構築することを目指し、このような機会を通じて、普段あまり言えない本音の部分を語り合うなど、創造的な営みを実現することにより新たな不登校を生まないことにつながった。

#### (2) 三者連携の在り方

##### ア 指導・対応方針の明確化

学校としての生徒指導の指導方針を明確にし、さらには、その実効性を図るため指導・対応方針の明確化に向けた取組を行った。策定義務のある「いじめ防止基本方針」はもとより、生活指導に関わる様々な事案について具体的に保護者に明示した。これにより、生徒のみならず保護者にも安心感を与え、開かれた学校づくり、ひいては学校への信頼を得ることにもつながったと捉えている。

イ 保護者との連携

様々な学校行事等を通じ、学校と保護者が考えを共有する機会を数多く設けた。携帯電話における「家庭内ルール」策定の際には、学校と保護者、あるいは、保護者同士が文字通り膝を突き合わせて真剣に話し合えたことで、これまで以上に協力しやすい体制づくりにつながった。

(3) 信頼関係と的確な実態把握

ア 「学校楽しいーと」の活用

本校では、学級の実態はもとより、学年ごとの傾向とその分析を行うなど、学校のみならず生徒を取り巻く全ての環境の整備を含めた包括的な支援体制の確立を図ることを目的とし、5月下旬に1回目、10月下旬に2回目の「学校楽しいーと」を実施した。その結果、どの学級（学年）においても、「自己肯定感」と「心身の状態」が低いという結果が明らかとなった。

先行研究から、大人からの一貫性のある支持的な関わりと友達からの承認による自己肯定感の獲得、そして、主体的な活動に基づく達成感と自分の長所を認められて自己効力感をもつことにより、生徒のレジリエンス（適応力・耐性力）は向上するとされ、さらに、レジリエンスと心身の状態は正の相関関係を示すことが証明されている<sup>\*1)</sup>。そのため、SST や教育面談等を通じ、共感性をもって生徒に接することに重点を置いた。その後、2回目の結果を見ると、1回目との比較で、2学年は6観点中3観点、3学年においては6観点中4観点が改善した。また、両学年とも「自己肯定感」はやや改善が見られ、「心身の状態」においては大幅な改善が見られた。このことから、自己肯定感や心身の状態が向上したことにより心身の健康の保持及び安定が図られたものと推測する。

【「学校楽しいーと」の結果による集団（2学年）の変容】

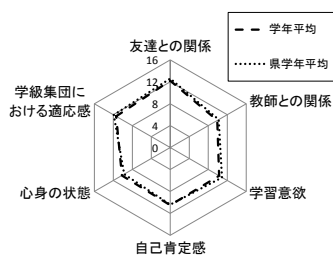


図1 5月の状況

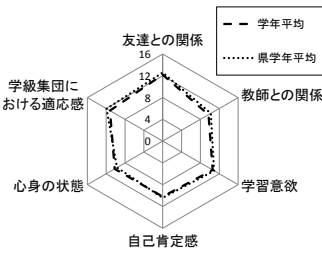


図2 10月の状況

表1 2学年の6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12.1	→	12.2
教師との関係	10.1	→	9.7
学習意欲	10.6	→	10.6
自己肯定感	10.0	→	10.2
心身の状態	9.7	→	10.2
学級適応感	11.4	→	11.2

【「学校楽しいーと」の結果による集団（3学年）の変容】

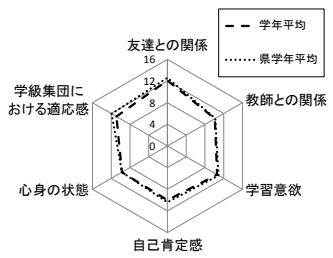


図3 5月の状況

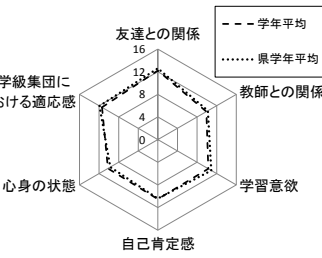


図4 10月の状況

表2 3学年の6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12.1	→	12.2
教師との関係	10.1	→	9.9
学習意欲	10.6	→	10.3
自己肯定感	10.0	→	10.5
心身の状態	9.7	→	10.2
学級適応感	10.9	→	11.4

イ 出欠状況の集約・分析・区分

予防開発的な不登校の未然防止の観点から、心の教育推進委員会が中心となり、前年度における出欠席等の状況を基に「一次サポート群」と「二次サポート群」の区分を行った。さらに、学習・生活状況や、生徒及び保護者とのラポール（信頼関係）は築かれているかなど、状況把握と的確なアセスメントに全力を挙げて取り組んだ。これにより、全職員の不登校に対する意識が高まり、学校全体として組織的な指導体制の整備・充実につながった。

ウ 「チーム支援シート」を活用した個への指導・援助

「学校楽しいーと」やインターネット利用等実態調査の客観的データ、さらに、保護者との連携といった基本情報や、チームによる相互コンサルテーションを行うなど、その対応の効果と問題点を検討した上でアセスメントを行った。その際、生徒の興味・関心や長所といった資源（ストロングポイント）に焦点を当て、共感的理解に重点を置いて取り組んだ。これにより、学校での意識化（チームで関わる）・組織化（学校の特徴に合った形）を促し、生徒の言動の背景に対する理解も深まった。

\*1) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治著『ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—』

【「学校楽しいと」の結果による生徒Aの変容】

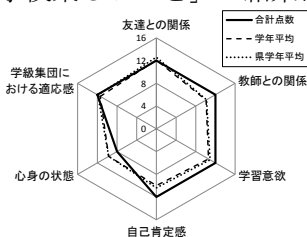


図5 5月の状況

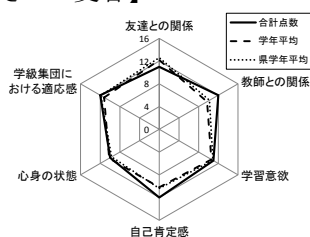


図6 10月の状況

表3 生徒Aの6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12.0	→	11.0
教師との関係	12.0	→	12.0
学習意欲	12.0	→	11.0
自己肯定感	12.0	→	12.0
心身の状態	8.0	↗	10.0
学級適応感	12.0	→	12.0

ア 10月の結果の分析

上記のとおり、第1回目より「心身の状態」が改善した。その他の観点においても、「友達との関係」を除き学級平均を上回った。「友達との関係」が減少した要因の一つとしては、ネットへの依存と、それに伴うコミュニティの付き合いにおけるストレス等が考えられる。

イ 指導・援助の方針

様々な調査等から、極めてネット依存の傾向にあり、ネット上のコミュニティの付き合いがあることも明らかとなった。そのため、生活のリズムを整え生活習慣を改善するよう働き掛ける。

ウ 具体的な働き掛け

- 緊張感や不安が高い生徒であることから、声掛けや挨拶を通じラポールの形成に努めた。
- 生徒の可能性を信じ、自発的な行動を引き出しながら共に育とうと「共育」を実践した。
- 家庭環境も心身の状態に大きな影響を及ぼすものと考えられることから、保護者の相談に乗り、関係機関と連携の調整役を担うなど、家族関係の改善を目指した。

エ 「チーム支援シート」による生徒Aのアセスメント及び指導・援助

指導・援助方針	誰が	何を	機会
緊張感や不安が高い生徒であることから、クラス内、あるいは、学校の中に安心できる人間関係の構築	担任 生徒指導主任	担任との安定した関係形成	個別指導 教育面談 普段の生活
登校時には努力を評価して喜び、精神的葛藤については、本人・保護者の不安もしっかり受け止め、安定した支援の継続	養護教諭 副担任	生徒及び保護者の支援	教育面談 電話連絡 家庭訪問

オ 「チーム支援シート」による指導・援助の結果

自らの居場所を確立し、他者に受け入れられたことで所属感が増し、その結果、落ち着きを取り戻し「心身の状態」の向上につながった。

3 成果と課題

(1) 成果

- 前年度における出席等の状況を基に区分したことで、学校全体として組織的な指導体制の整備・充実につながった。
- 「学校楽しいと」を通じて面談等での話し合いが効果的になされ、生徒自身の自己理解を深めるきっかけとなった。
- 「学校楽しいと」を通じ、家族や周りが励ましなどの支援を積極的に行い、これまで以上に真剣に生徒と向き合い、支援体制を確立させることにつながった。
- 「チーム支援シート」を活用したことで、基本情報の収集にとどまらず、アセスメント及び指導・援助がチームで検討され、働き掛けが具体的になされた。

(2) 課題

- △ 全体的に「自己肯定感」が低い生徒が多いことから、過去との比較の中で成功体験を経験させて、否定的な情動感情を軽減するコーピングスキル（ストレス対処スキル）や、困難な状況でも立ち直ることができるようにレジリエンスを高める取組を強化する必要がある。
- △ 「学校楽しいと」を活用する意義等について、理解を深めるための職員研修を実施するなど、より校内の連携意識を高める必要がある。